A-Lab Artist Talk

「A-Lab Artist Gate 2017」

出　演　おかけんた、稲垣美侑、井村一登、木原結花、木村友美、樗松夏実、濱口芽、吉野滉太
司　会　シティプロモーション事業担当　松長
日　時　平成29年6月3日(土)／午後2時から午後4時
場　所　あまらぶアートラボ(A-Lab room1)

おかけんたさん

大学や自身の作品について

おかけんたさん（以下　おか） こちらの施設は私がアドバイザーとして関わらせていただいています。吉本の芸人ですが、アートの仕事もさせていただいていることもあり、モデレーターとしてお呼びいただいています。今開催している展示では、お越しいただいている７名のアーティストに、それぞれの場所で展示を行っていただいています。今回は展示している作品がどのような作品なのか、また、美術大学を卒業されているので、美術・芸術系の大学はどのようなところなのかをご紹介頂きたいと思います。それではまず木村友美さん、よろしくお願いいたします。

木村友美さん（以下　木村） よろしくお願いします。私は、京都造形芸術大学の大学院を修了しました。

おか　大学院っていうのはよく聞きますが、一体どういったところですか。

木村　大学院は大学よりも自主性が進んでいて、専攻ではない先生の授業を受けることもできました。造形大学を一言で言うと、増殖と改築をし続ける大学です。

おか　わたしもそれはすごく感じます。大学内のギャラリーみたいなところに急にカフェができたりして。そういったのは学生に連絡はないんですか。

木村　ないですね。

吉野滉太さん（以下　吉野） 作り始めてから何かできてるなと思い、その後久しぶりに行ったらできていました。

おか　そのカフェには行きました？

木村　１回だけコーヒーを買いました。コーヒーは安いのですが、その他はあまり学生向きではないです。大学には舞台とかがあり外部の人がよく出入りしていますので、その方々が利用していると思います。

おか　よくわかりました。造形大というのは色々と変化をつけながら新しいものにどんどん挑戦しているということですね。それでは作品の説明をお願いします。

木村　今回は複数で出させていただいているのですが、作品は幼い頃から石ころ、祖父母の家の屋根、ネコの目などの青いものに、なぜかパッと目がいっていました。青いものが自分の人生のアクセントになっているのかなと思い、今回の作品を制作しました。

おか　これは日本画の作品になると思うんですけれども、コラージュしたものとかもありますよね。

木村　そうですね。日本画でよく使われる岩絵具や顔料、マニキュアを用いて和紙を染めて貼ったりしているので、コラージュ的な感じもあります。線は、ステンシルのように岩絵具をスポンジで押すなどして日本画のコラージュみたいな作品を制作しています。

おか　仕上がるところは日本画で表現しつつ、ミックスメディアのような手法になるんですね。これは一見ではわからないですね。それでは続いて稲垣美侑さんよろしくお願いいたします。

稲垣美侑さん（以下　稲垣） 東京藝術大学の大学院を卒業してたのですが、現在は博士過程に在籍

木村友美さん

しています。なんちゃって卒業みたいな感じです。

おか　私ちょっとわからないんですけれども、博士課程ってどういったものなんですか。

稲垣　大学が４年間、大学院が２年間、そのあとさらに専門的に学びたい人が進む課程で３年間になります。最後に作品と論文を書いて合格が出れば「博士号」が取れて卒業となります。

おか　結構みなさん取ってはるんですか。

稲垣　どんなに長くても６年以上居られないので、合格が出なかった場合は満期退学と言って博士号を取れずに卒業することになります。

おか　敢えてそれに今挑戦しているということなんですね。日本画では村上隆さんも出身ですよね。それでは東京藝術大学がどういった大学かを教えてください。

稲垣　生徒の多くは、個人主義であり、独立心が強く、やるかやらないかみたいなイメージで大学にいました。

おか　環境はいいところですよね。

稲垣　駅が近かったり公園があったり、制作できる工房も多く環境は良いが、自分がやらなければ大学側からは手も貸してもらえず、良くも悪くも本人次第です。

おか　自分が頑張らないといけない、個人個人の力が試されてるということですね。それでは作品の説明をお願いします。

稲垣　普段私が訪れた街や環境をモチーフにしながら住まいをテーマに作品を制作しています。なので見て頂いたらわかるように家とか空き地をモチーフにすることが多いです。絵画やガラス作品を用いてインスタレーションを展開しています。

おか　元々は写実的な絵を描かれていたのですか。

稲垣　学部時代はもう少し写実的なものを描いていましたが、研究を重ねるうちに、現在のような家かどうかがわかるギリギリの作品を制作するようになり、形をどういう風に認識するかなどを考えています。

おか　どうやって作品が変化していったかというのをこのあとのコーナーでお聞きしたいなと思います。それでは次に木原結花さんお願いします。

木原結花さん（以下　木原）　私は大阪芸術大学の写真学科を卒業しました。

おか　どういった大学でしょうか。

木原　山の上にあって自然がいっぱいのいい大学だと思ってます。

おか　アートサイエンス学科が新設されるということで、大学内では話題になったのですか。

木原　新しく校舎を建てることになっていたんですが、そのことでバスが通れなくなり坂の下で降ろされていました。学生に取っては大変でした。

稲垣美侑さん

おか　それはもう学生さんの悲痛の叫びですね。

木原　足がパンパンになります。

おか　展示作品についてはどうですか。

木原　廊下で展示をしているのですが、身元不明で亡くなった人の遺体を行旅死亡人というのですが、新聞や官報、警察のホームページに文字のデータで掲載されています。その文字情報からこういう人なんじゃないかと想像して１枚のポートレートを制作した作品『行旅死亡人』を展示しています。制作方法は、新聞などの記事をもとに、チラシや画像検索で条件に合う人を探し、パソコンで合成してます。ときには、現場まで足を運ぶこともあります。

おか　なぜ作品にしようと思ったのですか。

木原　ゼミの先生に行旅死亡人の新聞の複写とスナップ写真が掲載されている写真集を貸してもらい、行旅死亡人に興味を持ちました。行旅死亡人になる人はホームレスの人が多いみたいで、小学校の頃に仲良くなったホームレスの人を思い出しました。いつも公園で豆腐を食べていたので『豆腐おじさん」と呼んでいました。夏休みに仲良くなったのですが、休みが終わると会わなくなり、

木原結花さん

井村一登さん

大学生の時には顔も思い出せなくなっていました。そういうことがあり、今回の作品を制作しました。

おか　そのおじさんがいたからこの作品ができたということですね。もしかするとこの中にいてるかもしれません。作品は何人くらいあるんですか。

木原　全部で５０人くらいありますが、今回は２５人くらい展示しています。

おか　ありがとうございます。それでは井村一登さんお願いします。

井村一登さん（以下　井村）　大学は京都市立芸術大学を卒業し、大学院は東京藝術大学大学院に進学しました。

おか　大学が変わってるということで気持ちとかガラッと変わったりしたんですか。

井村　ガラッと変えたかったというのがありました。大学ではキュレーターのための勉強をしていました。その中で、やっぱり制作をしたいという気持ちが強くなり、大学ごと環境を変えてみようと思いました。

おか　制作する環境はよくなりましたか。

井村　ほぼ大学に行ってないですね。必修の単位がほとんどいらなくて、集中講義の塗装の授業を受けて取り終えました。大学のアトリエまで往復５時間かかったので、自宅か近くの工場を借りて

制作していました。

おか　今回の展示作品、ちょうど隣の部屋の倉庫のところに展示していますよね。

井村　４年くらい凸レンズを使ったマジックミラーの作品を制作していまして、個室が映える作品なのですが、なかなか大学の展示室ではできませんでした。今回は個室で暗室なのでずっとしてみたかった理想的な展示ができました。

おか　なぜこのような作品を制作しようと思ったのですか。

井村　元々、鏡、マジックミラー、凸鏡に興味があり、合わせ鏡のようにしたら面白かったのですが、他の人でもしている人がいました。そうした時に、「合わせ鏡の中に何を映すのか？」ということが決め手になってくるなということで、最初はお金とかを入れてみたのですが、ある時、凸鏡を入れた時に、同じ大きさの像が続くのではなく、収縮された像が連続して見えることが面白いなと思い制作しています。マジックミラーの透過率によって作品がクリアになっていくので、透過率を少しずつ変え、試行錯誤の上できた作品です。

おか　ありがとうございます。それでは樽松夏実さんよろしくお願いします。

樽松夏美さん（以下　樽松）　京都精華大学を卒業しました。大学は映像コースに通っていて、アニメーションの作成をしていました。

おか　叡山電鉄のところですよね。

樽松　観光のための電車が最寄りなので、観光客が多い時期にはなかなか電車に乗れない時もあります。

おか　大学を一言で言いますと。

樽松　山の中の大学です（笑）。

おか　今回の展示についてですが、どういったところから発想されるのですか。

樽松　昔からアニメが好きだったのと、NHK をよく見ていたことですね。

おか　言っていることすごくわかります。いろいろなことをしている放送局ですからね。

樽松　卒業制作の時に、今後の作品のテーマが「愛」、その中でも「人を思いやる心」と決めました。今回の作品は、そのテーマを家族に反映して制作しました。真ん中を仕切って部屋のようにしてインスタレーション的な展示をしていまして、部屋の隅にいる子は「愛」を知らなくて、部屋の中が全てと思っている子です。その子を見て、私たちはどう思うのか、何をすべきかを考えて作りました。

おか　昨年度も同じ部屋で映像の作品で、どちらもすごく特徴的で面白かったです。それでは濱口芽さんよろしくお願いします。

濱口芽さん（以下　濱口）　京都市立芸術大学の大学院を修了しました。大学は様々な分野の方がいてガラパゴスというイメージです。みなさん通学が大変そうなのですが、私は裏門から徒歩 10 秒のところに下宿していました。

おか　そんなに近いのは気分的にどうなんですか。

濱口　自分の制作室から家の窓が見えるほど近いので大学が家の庭みたいな感じでした。

おか　作品についてお教えください。

濱口　学部時代は油絵出身なのですが、キャンバスから飛び出した作品を制作していました。モデルを見て人体のラインを描いていましたが、モデルが自分でもいいなと思い、卒業制作ではブースの中でヌードになってラインをテープで描くという公開制作を行いました。

樽松夏実さん

おか　すごい勇気がいることですよね。周りから何か言われましたか。

濱口　やりよったって言われました。教授からは一回脱いだら大丈夫やろと。

おか　今回展示している作品についてお願いします。

濱口　元の形に手を加え日常にあるものをずらす、曖昧にすることをテーマに作成しており、今回は包帯を使用しました。トング、ハイヒール、ティーカップなどの全部を隠すのではなく、一部を残す形で存在するギリギリのところを表現しています。

おか　ありがとうございます。それでは最後、吉野滉太さんお願いします。

吉野滉太さん（以下　吉野）　京都造形芸術大学を卒業しました。通学においては僕に優しくない大学でした（笑）。

おか　どう優しくないのでしょう。

吉野　大阪から２時間かけて通学していたのですが、スクールバスが無く、市バスに乗って大学まで行っていました。祇園祭の時は人も多く、また、運行ルートも変わるので、駅まで着くことができませんでした。いかにして友達のところに泊まるか必死でした。

おか　それもいい体験ですよね。

吉野　でも大学の先生方はいい方ばかりだったと思っています。

おか　それでは作品の紹介をお願いします。

吉野　布の横糸を抜いて縦糸だけにした物を立体的に再構成した作品や、今回展示している電線を広げて張り巡らせた作品などを作成して出していました。卒業制作でも制作した作品ですが、今回はコンセントから始まるように表現しました。

濱口芽さん

おか　コンセントありましたか。

吉野　今回の展示のためにつけました。

おか　なぜあそこの場所に展示しているのですか。

吉野　インスタレーションということもあって吹き抜けの場所の方が作品が映えるかなと思って展示しています。

おか　じっと見ていてなんとも言えない感じなんですよね。蜘蛛の巣でもないし、亀裂が入っているようにも見えるし、支持的な面白さもありますしアナログな感じも。そういう意味では面白い作品ですね。

自身のターニングポイント

おか　７名のアーティストの方にご自身と作品をご紹介いただきましたが、もっと過去に遡って自身のターニングポイントをお聞きしたいと思います。作品が変化した時に何が起こったのかなどお話しいただきます。まずは木村さんお願いいたします。

木村　『ケガ』です。写実的なスケッチをしていたのですが、次第に思い詰まるようになり、どうしたらいいんだろうという時期がありました。その時に、包丁を足に落とし親指の腱を切ってしまい

ました。ちょっとだけ強制的に休まないといけなくなったのですが、考える時間ができ、今の作風になりました。

おか　「怪我の功名」というやつですね。

木村　やりたいことをやろうという考えに変わっていきました。

おか　次、稲垣さんは？

稲垣　『何も知らない』と思う瞬間があります。家族、友達などと自分との関係や、自分はどういう人間なのか、人と接する時に変わる自分が気になる時期がありました。友達といる時はため口で、先生と話す時は敬語、１人の時は１人の自分がいて、だけどもそれは意識して変えているものではないことがすごい不思議でした。その延長で日常の普通の出来事にもなぜかと疑問を持つようになりました。また、震災にすごい衝撃を受け、なんで絵を描いているのかなどすごく考えました。人の中に見る土地や性格が形成される、文化が育まれるなどの環境に興味を持ち、人や家を表面的には描いているのですが、外形的な人とかものの存在ではなく、存在する器として住まいや土地として描いています。旅行も好きで、どんな人がいるか、どんな土地なのかを考え旅をしています。関西の展示も初めてですごく楽しみでした。

おか　ある種リサーチではないですけど、そういうことが自分のエネルギーに繋がっているということですね。ありがとうございます。それでは次に木原さんお願いします。

木原　『コミケ』です。『行旅死亡人』を制作した時に、これは展示をしてもいいものなのかと思い悩んだ時期がありました。その時、コミケのカタログを見てみたら行旅死亡人の同人誌が売られていたのを知り買いに行きました。実際に制作されている人にお会いするとすごい情熱を注がれている人で総集編が３冊もあり、すごく衝撃を受けました。

おか　それまでは軽い気持ちで制作されていたのですか。

木原　そうではなくて、デリケートな問題なので、これを軽々しく作品にして発表していると死者を冒涜しているんじゃないかと思っていました。ただ、その人とお会いしてから、私も負けてられないと思い制作しています。

おか　今もその方と続いているのですか。

木原　いや、続いていないです。

おか　ありがとうございます。それでは続いて井村さん、お願いします。

井村　『初の依頼』です。大学２年生のとき初めて作品制作の依頼で、料理人からカクテルグラスを落として割ってしまった瞬間を作品にしてほしいとのことでした。アクリルや透明樹脂を使って制作していたのですが、気泡や線が入ってしまっていました。制作方法がわからず、いろいろな人を頼ったのですが、プロのアーティストの方でもなかなか解決策が出てこないものでした。その時に、プロのアーティストの姿を見て、自分がどうやってプロになっていったらいいのだろうかというのが見えました。

おか　大学の先生もアーティストの方ですが、大学ではなく外で会うことで実際にどうやってアーティストになっているのかが見えたということですね。

井村　先生をやっているところしか見えていなかったので、外で見ることでプロに対する意識が変わりました。

おか　ちなみにその作品はどうなりましたか。

井村　父から工場を紹介してもらい１週間で制作することができました。身近な所に答えがありました。

おか　そこに行くまでにどれくらいかかったのですか。

井村　１年半です。

おか　１年半の旅、すごいですね。それでは樽松さんお願いします。

樽松　『京大生』です。ターニングポイントを考えた時に、私がアートアニメーションに出会ったのが起点だったかなと思いました。高校生のとき『４畳半神話大系』というアニメに出会い、作風がアニメアニメーションではなくアートアニメーションよりでした。それを見た時に、アニメが可能性を持っていること知り、興味を持ちました。主人公が京大生で、京大生に憧れ、どうしたら京大生になるだろうと考えたとき、京都の大学生なら京大生ではないかと思いました。

おか　全然ちがうよ（笑）。京都造形大学は京都造形大学ですよね。

木村　京大生です（笑）。

吉野　京大生です（笑）。

樽松　映像ができるところを探し、京都精華大学の大学生、略して京大生になりました。

おか　おれの早稲田速記専門学校、略して早稲田と変われへんがな。でもそれが京都に来るきっかけになったんですね。続いて濱口さんお願いします。

濱口　『震災』『体育』『大学院』です。『震災』が入学の年で、美術は食べ物とかの第一次支援ではなくて、美術はすぐに役に立たないってどうやねんと思い、直接作品のテーマに出来なかったのですが、思い返すとそのことが影響していると感じました。『体育』は、怪我なんですけど、授業で足を骨折をしました。怪我をする前はインスタレーション的に体を動かし、大きな作品を作ることが合っていたのですが、骨折でできなくなりました。ギプスをしている足を見た時に、外は硬いのに中柔らかい、どこまでが自分の体なのかを考えるきっかけになりました。

おか　そのことから今使っている包帯がでてきてるわけですね。

濱口　そうですね。ずっとテープを使っていたのに包帯に変わったのが自分の中ですごく大きなことでした。また、大学院に入る時に先生を変えてみようと思い、美術をもう一度考えるきっかけになりました。

おか　やっぱり繋がっていますよね。さっき怪我の話もありましたが、一旦自分の中で処理したものを自己表現する時に、そういう出来事の影響は強いかもしれないですね。

濱口　私が自分に起こったことを表現することが興味があるのでよく影響を受けていますね。

おか　それじゃあもう一回骨折したら変わるかもしれませんね。

濱口　怪我して治ってから作品のことで悩んだ時に、もう一回骨折したらいいんじゃないかと考えることはありました。

おか　いろんな意味でストイックで面白いですね。ありがとうございます。それでは最後、吉野さんお願いします。

吉野　『CM』です。大学の１年は、美術がほとんどわからなく、何をしたらいいのかわからなくて、他の大学に行って野球やバスケなど運動ばかりしていました。高校時代も高校球児で野球ばかりしていたので、美術大学に進んだものの何をすれば

吉野滉太さん

いいかわからないでいました。

おか　今の段階ではなぜ美術に進んだかがわからないですけどね。

吉野　言いにくいんですが、受験勉強が嫌で、絵を描いて大学に入れるということで勉強よりもいいだろうと思い入学しました。１年間美術に真剣に取り組むことなく運動ばかりしていました。ある時、海外で放送されているダヴの「リアルビューティースケッチ」という CM に出会い、美術ってすごいなって思いました。

おか　どんな CM だったんですか。

吉野　１人の FBI のモンタージュ画家の人が１人の女性から自分の容姿を聞いて描いたものと、第三者から聞いて描いた女性の絵を比べるというものでした。自分で話したスケッチは暗く、第三者から聞いたものは明るく描かれており、印象が全く違うものになっていました。その時に、言葉で「かっこいいですね」「綺麗ですね」と言われてもどのへんがというのがわかりませんが、絵にすることで目に見える形で誰かに伝えることができるのが美術だけだと思い、美術を本当にすごいものだと感じました。

おか　それは高校の時ですか。

吉野　だいぶ遅いですけど大学入って２年生になる前です。

おか　みなさんありがとうございました。

アトリエに置いてあるもの

おか　最後になるのですが、みなさんにアトリエにあるものを紹介いただきます。

木村　『海綿』です。これを使って岩絵の具などをステンシルの要領で、版に使っています。

おか　すごい硬いですね。

木村　柔らかいものもあるんですけれど、私は硬いもののほうが好きです。

おか　ありがとうございます。それでは次お願いします。

稲垣　『ノート』と『ペン』です。制作の手前で常に持ち歩いており、制作時に気になったものをノートに書きとめています。ペンもこだわりがあり、インクのストックも持ち歩いています。

おか　ペンはそれじゃないとダメなんですか。

稲垣　止むを得ず違うペンで書く時もありますけど、ベストはこれです。

おか　常備しているってことですね。それでは次お願いします。

木原　ブルボンのお菓子『ルマンド』です。

おか　お腹すきますもんね。なんで『ルマンド』なんですか。

木原　小学生の頃から大好きで、大学の購買部でたくさん売っていました。

おか　今食べたいですか。

木原　すごい食べたいです。集中している時に口が寂しくなるので、食べて集中しています。

おか　作品の協力に入れないといけないですね。

木原　そうですね。「協力　ルマンド」ですね。

おか　井村さんは？

井村　ものではないですけれども、『お笑いの賞レース』が大好きです。１年間、これがあるから頑張れています。去年の課題が克服されているのかや自分たちの魅力に気付けたのかなどを考えながら見ています。

おか　自分の魅力に気付けたかですか。

井村　この人がいるから面白いとかあるじゃないですか。たまたま興味があったのがお笑いだったんですけれども、作品でもこの人が作るから意味があるということとかあかんかったところを克服していく姿がすごく刺さります。

おか　ありがとうございます。それでは次お願いします。

樗松　『ペンタブレット』です。

おか　すごい使い込んでますね。

樗松　15 年も前から愛用しています。今は新しい性能のものがたくさん出ているのですが、ここまで使っているので描きにくいですが壊れるまで使おうと思っています。実際は私のものではなくて、姉がクリスマスプレゼントに貰って放置していたものを掘り出して使っています。

おか　お姉さんも喜んでいると思いますよ。

樗松　多分使っていることを知らないと思います。

おか　ありがとうございます。続いていきましょう。

濱口　『携帯』と『テープ』です。携帯は音楽を聴いていて、テープは以前絵を描く時に使っていたものです。今は包帯を使っていますが、前の画材も置いているので持ってきました。

おか　巻いてるもの好きですよね

濱口　そうなりましたね。

おか　ありがとうございます。それでは最後、吉野さんお願いします。

吉野　『漫画』です。細かい作業に行き詰まったときに息抜きに読みます。主人公が、私が知っている中で一番の頑張り屋です。

おか　野球選手や芸術家でもなく漫画の主人公が一番頑張り屋さんなんですね。

吉野　主人公がサックスを吹いていて、この漫画を読んだ後にもう一回頑張ろうという気持ちになれます。

おか　ある種、必須アイテムみたいなものですね。

吉野　そうですね。

おか　意外なものが出てきましたね。作品を見ていただくだけでなく、各作家のターニングポイント、アーティストはどういったことに刺激を受けて現在に至っているのか、そして今現在どういったものを使って、どういうものに関してどのようなイメージを持っているのかについてお話を伺いました。もう一度作品を見ていただくとまた違った見え方がすると思います。今回は新鋭アーティスト発信プロジェクトの第２弾「A-Lab Artist Gate2017」ということで７人のアーティストの方に来ていただきました。みなさま、ありがとうございました。